市電物語 ㉟

飛び交う砲弾 爆風運転席にも

京都空襲

あれは、井上正範さん(七〇)＝伏見区深草正覚町＝にとって、いまもいまわしく、悲しい事件である。

「空襲がこわいので」と神戸の義弟が泊まりに来た、警戒警報もない静かな夜のことだった。

「寝入りばなで、音はわからなかった。気がついたときは壁土や天井板が顔やふとんの上に降っていた。玄関の前に落ちたようだ」無残な変わりようだった。気は半分が一瞬に吹っ飛んだ。井上さんの長女(一二)は下敷きになって即死、妻と義弟は破片が貫通して片目を失明した。二男は足を折って、いまも不自由な身だ。

昭和二十年一月十六日午後十一時十分。B29一機が京都を初めて空襲、東山区馬町の民家四十四戸が全半壊、三十四人の命が瞬時に奪われ、五十六人が負傷した。

馬持与作さん(七八)＝南区西九条東比永城町＝は、東山線に市電を走らせ、車庫へ帰る途中、この空襲に出くわした。「突然ドカーンというものすごい爆音がした。たちまち運転席に土ぼこりがもうもう。近くの京女(京都女専)の寄宿舎に赤い火柱が立っていた。すぐ乗客を避難させ、近くのお寺の石がきで十五分もじっとしていたでしょうか。びっくりしましたなあ。女の車掌さんなんか、ふるえて一人で帰られんので、家まで送ってやりました」

昭和十七年四月、初めて大工を襲った米軍機の空襲は、二十年からなめつくすように、じゅうたん爆撃を加え、東京、大阪などは焦土と化した。直接の攻撃対象にならず、誤爆といわれる京都でも二十年、東山、梅津、西陣など市内六カ所に爆弾や焼夷弾が落とされ、時速一〇㌔前後の市電の前にも機関砲弾がパシッパシッと飛びかった。

「本土決戦」が叫ばれていた。市電の運転手は鉄帽を首に、巻脚絆(ゲートル)を足に巻いて運転。モンペ、ゲートルの防空服を着ずに乗った市民は、憲兵に殴られた。人手不足はピークに達し、切符の車内売りは中止、混雑緩和を図るため、市電の乗車システムは乗切制に変更された。

また、軍需産業への輸送確保をめざし、工場地帯の梅津へ新線(西院―梅津)が敷設されるが、レールがないため、鐵上線のそれを流去して当てた。

「欲しがりません勝つまでは」。しかし、空腹で本当に動けない運転手が現れ、ほとんどの運転手は休暇をとっては買い出しに出かけていった。「私は監督という立場上、それができなかった。イモの葉や茎を食べてがまんしたが、情けない思いでした」と、柴田仁さん(七〇)＝右京区嵯峨明日町＝。一回の買い出しで一月分の給与(約六十円)が浮くというので、運転手を廃業、買い出し屋になる者も出る始末。市電の監督の浪田さんは、運転手のやりくりにずいぶん泣いた。

そして、祇園囃(はやし)も消えた昭和二十年夏、広島に新型爆弾が投下され、日本の敗戦は決定的になった。

読者のみなさんへ 「市電物語」は、一応今回で戦時中までを終え、しばらく休ませていただきます。年明けとともに戦後編を連載しますので、ご期待下さい。

昭和20年1月、東山区馬町に爆弾が落ち、90人の死傷者を出した(宮川友治さん提供)